

研究ノート

メディア・アートの交通論——《Light on the Net》をめぐって Communicational Logic of Media Art

篠原 資明 (詩人、美学／高松市美術館館長)
SHINOHARA Motoaki (Takamatsu Art Museum)

光のアート

最先端のメディアに通じてるわけでもありませんので、アートの方から、攻めてみようと思います。その一方で、専門は何かと言われたら、哲学・美学ということにしていますので、そちらの方にもつなげていければと思います。まず、藤幡さんの《Light on the Net》ですぐわかるのは、やはり光を使ってるということです。電灯の光。そこでまずアートの文脈として浮かび上がるのが、光のアートということです。ただ、光のアートを歴史的に延々と辿るわけにもいかないので、最近、たまたまいい展覧会がありましたから、そこから拾ってみます。

実はミラノでルーチョ・フォンタナの作品を再制作した展覧会が今やられています。いつまでかは忘れましたが、この《ネオンによる構造》[図1]はネットで拾ったものです。ネオンを使った光のアートを、フォンタナは結構試んでいます。フォンタナといえば、切り裂かれてる作品を思い浮かべるでしょうけど、いろんな試みを行っています。

これもほんとに、再制作といっても随分創造というか、クリエーションが入っているんじゃないかなと思いますけど、《エネルギーの泉》[図2]です。元々は1961年で、今回再制作してものです。

次の同じくフォンタナの《空間環境》[図3]、これも、同じ展覧会からです。1966年だから死の2年位前ですか。いつまでも若々しい試みをしていた人なんです、フォンタナという人は。

フォンタナの光のアートは、基本的にネオン管によるものですが、フレイヴィンとなると、蛍光灯です。エスパルイ・ヴィトン東京で展覧会が行われました。映り込みが、とてもきれいです[図4]。蛍光灯を使って60年代に始めた試みで、年代的に少しだけフォンタナとも重なります。世代的にはフォンタナがはるかに上なんで

すけれども。ダン・フレイヴィンは1933年生まれで、96年に亡くなってます。フォンタナは1899年生まれで、1968年に亡くなってます。ただ、フォンタナが光を使い始めるのは、切り裂きよりは前です。

もうひとつ、アートに関して挿入したいパラメーターがあって、それが「開かれた作品」ということで、だんだん藤幡さんの試みに近づいていきます。開かれた作品というのは、ウンベルト・エーコが『開かれた作品』で提示したモデルです。原著は1962年です。邦訳は、私と和田忠彦との共訳で、青土社から出ています。1984年に邦訳の初版が出たんですけど、まだ版を重ねています。『開かれた作品』の中では、さまざまなジャンルから、いろんな作品が取りあげられていますが、ここで注目したいのは、ブルーノ・ムナリーの《ヴェトリニ》というシリーズです。ヴェトリニというのはスライドの複数形です。つまりスライドを使って、観客が自由にプロジェクターを操作しながら、映された絵を作っていきます。だから、受け手の参加を要請する「開かれた作品」ということになるのです。したがって、観客がそれをいじらなければ、作品は成立しません。そういう作品をエーコは「開かれた作品」と呼びました。これは結構いまだに有効な観念じゃないかと思っています。

この《ヴェトリニ》シリーズを、1950年代前半にムナリーは始めたのですが、すぐ評判になったみたいで、55年にMoMA、つまりニューヨーク近代美術館で、Munari's Slides という展覧会が開かれています。例えばこういうスライドが使われています[図5]。基本的に抽象的な絵を描いていたので、スライドの中の画像も、抽象画になってるようです。ブルーノ・ムナリーと、ヴェトリニというのを、アルファベットで検索しますと、大体YouTubeで、その変化する模様が見られます。



図1 フォンタナ 《ネオンによる構造》



図2 フォンタナ 《エネルギーの泉》



図3 フォンタナ 《空間環境》

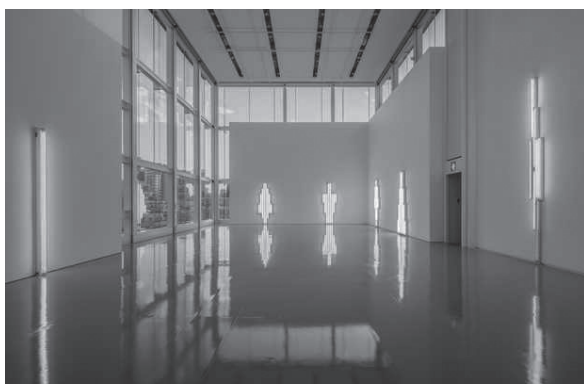


図4 フレイヴィンの展示

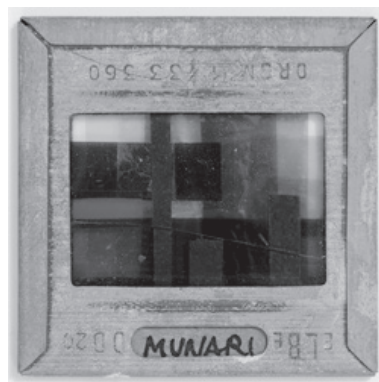


図5 ムナリーが《ヴェトリニ》に使用したスライド

単交通・双交通・反交通・異交通

エーコはこの開かれた作品の特徴をいろいろ挙げてるんですけど、藤幡さんの試みにぴったりな言葉を少し引いておきます。それは「許容される可能性の場の範囲内で創造に協力」すると。そういう考え方です。要するに可能性の場としての作品ということにもなるかと思えます。

私的にまとめようすると、25年位前から唱えている自分の立場がありまして、それは、あいだ哲学と交通論というものです。どんなものでも、あいだで生起する交通から成り立つというのが、その基本的な立ち位置です。ただ、あいだを語る人はいろいろといるのですが、あいだというだけじゃ、何も言ったことにならずに、そこで生起する交通の様態が、少なくとも4つはあるだろうと考えます。そして、その組み合わせで全て説明できるんじゃないかということで、マイナーながら延々と、この立場で分析、研究してるわけです。4つの交通様態というのは、まず単交通、一方通行的な交通様態です。つぎに双交通、双方向的な交通様態です。第3に反交通、交通遮断される様態です。第4に異交通。異質性を保持しつつ、さらなる異質性を生成させる交通様態です。この4番目の様態がつつい忘れ去られがちなのです。ただ20世紀の哲学では、基本的に問題とならざるを得ない、そういう様態だと思います。

例えば、マクルーハンによりながら、メディアの歴史で見てみましょうか。特にメディア論者として脚光を浴びた頃のマクルーハンです。マクルーハンは1980年に亡くなりますけども、晩年になると、メディアは自己崩壊するなんて暗いことを言っていたみたいなので、メディアが明るい歴史を切り開くみたいなの、そういうメディア論者としてのマクルーハンに限られるかもわかりません。さっきの交通様態で言うと、やはりマクルーハンの見たメディアの歴史というのは単交通から双交通へ、という風にまとめられるように思います。マクルーハンが挙げている例では印刷本です。だから『グーテンベルクの銀河系』というのが彼の主著のひとつです。グーテンベルクが、印刷本の銀河系を作り出したというわけです。基本的に、この印刷本の場合は、拡声器になります。作者の声を大きく拡張する拡声器になる、マクルーハンは、そういう言い方しています。だから一方通行なのです。作者が一方的に自分の立場を読者に押しつけるみたいな、そういう一方通行的な様態。要するに、作り手か

ら受け手への一方通行、単交通です。ところが電子メディア、まあマクルーハンは電気メディアと言っていたんですけど、今風な言い方に変えますと、電子メディア。これは、参加せざるを得なくさせる。そういうくくりで、たくさんのメディアを扱っています。当時受けたのはやはりテレビ論です。私は、テレビばかり見てると、自発的、積極的な思考ができなくなりますよといって、先生や親から言われた世代なのですが、よく考えるとそういう時代にマクルーハンはテレビは参加型のメディアだと言っていたというのは、とても新しいなと思います。もしそれを知っていたら、先生や親に反論できたわけですね。マクルーハンいわく、テレビを見れば見る程、考えるようになる。

ちなみに、さっきのエーコの立場とマクルーハンの立場、ほんとに重なっています。あまりこの点に注目する論者はいないのですが、マクルーハンが『グーテンベルクの銀河系』を書いたのが1962年で、エーコが『黙示録派と統合派』という本を書いたのも62年。マクルーハンの『メディア論』を書いたのが64年で、エーコが『開かれた作品』を書いたのも64年です。特にマクルーハンの『メディア論』とエーコの『開かれた作品』は、参加ということで、双交通の役割を非常に強調している。そういう立場を共有しています。ちなみに『黙示録派と統合派』の黙示録派というのは、メディアの進歩、マスメディア化が終末をもたらすという立場。要するに、マスメディアの振興は人間にとってよくないということです。おそらくエーコの念頭にあったのは、アドルノみたいな、フランクフルト学派の立場でしょう。これに対して、統合派というのは、メディアに迎合するタイプです。迎合派と言ってもいいかもわかりません。だから『黙示録派と統合派』も、一種のメディア論なのです。エーコという人は、大学出てすぐテレビ局に就職したので、テレビ事情に非常に詳しく、『開かれた作品』の中でもライブ中継に触れていて、リアルタイムの放送、生放送が、当時の最先端の映画とか小説に影響を及ぼしているという議論をしています。

双交通の^{うてな}台

ここであらためて、メディアの交通様態について考えてみましょうか。例えば身近なところで電話。これは、どちらからも話せるわけですから、まずは双交通的なメディアです。だから双交通の^{うてな}台と呼んでもいい。ところ

が、あいだがある以上はいろんな交通が起こりうるわけですから、単交通に転じることもあります。一方的に、商品の宣伝とか、かかってくることもある。皆さん経験おありでしょう。一言で言うと迷惑電話。これは要するに電話を単交通的に使った最悪の事例です。そうすると我々はどのような対処をするかという、反交通で対処するしかないわけです。つまり、ガチャンと切ってしまう。最近は便利なことに、すぐ設定できます。迷惑電話シャットアウト、これも反交通です。では、異交通はどうかというと、90年代に村上隆がやっていた試みで、ダイヤルQ2を使ったことがある。平成とともに始まったもので、0990というナンバーを押すものだからダイヤルQ2と言われました。最初はいいことをNTTは考えていたみたいですが、だんだん青少年の、特にエッチ系に転用されるようになってきた。皆さん身に覚えがあるでしょうけれども、10代の頃というのはそっちの方に関心が大きいですから、とんとんとんとんのめりこんで、親の方に多額の請求金額が行くとか、社会問題になりました。だから90年代の半ばにダイヤルQ2で電話をすると、電話を取った人は、そっちの話題かなと期待する、あるいは連想するわけです。村上隆はそれを逆手にとって、現代アートの話をする。女子に電話をして、現代アートのこういう試みがあってとか言い出すと、大体反応は2つに分かれる。まずほとんどは反交通です。何それガチャンと切られておしまい。でもたまに、乗ってくる女子がいたみたいです。90年代当時に彼から直接聞いた時、それ面白いなと思いました。電話という双交通の台を使った場合の異交通じゃないかと。全然コードが違いますから。つまり、村上が属するアート世界と、エッチ系を期待している女子達とのあいだに、異交通めいたことが起こったと考えられるわけです。

インターネットの場合ですけど、これも双交通の台です。ただ、単交通に転ずることもあります。中傷的なことをとんとん書き込まれたり、あるいは迷惑メールを一方的に送りつけられたりする。そうなると、シャットアウトする。迷惑メールのボックスに自動的に行くようにするとか。不審なメールは開かないようにと、大学でよく言われました。大学から大切なデータが盗み取られると、大変ですから。要するに、双交通の台であるだけに反交通の用心も必要ということです。ただ、ネット・ゲームの場合だったら、どっちが勝つかと、単交通vs単交通で競い合うこともあります。

《Light on the Net》

では、《Light on the Net》については、どうでしょうか。まず、作品を作るという場合は、作者のコンセプトを作品にします。ただ、この場合は作品といっても、ひとつのシステムです。そうはいっても、どうしても作品と言いたくなるのは、物としての現前する存在感があるからです。そこでやはり一応作品と言っておきます。作者、この場合の作者は複数であってもいいですが、作者がコンセプトを実現するというかたちで作品を作っていくというのは、基本的には一方通行でしかありえません。もちろん、作る過程で、コンセプトが修正を迫られるということはしょっちゅうあるけれども、基本的には単交通です。ただ、藤幡さんの作品の場合、作品が設置されている空間と、ネット空間とのあいだには、明らかな反交通があります。たとえば、コンピューターの前にユーザーが座している空間と、作品が置かれている空間は違いますから、どうしようもない反交通が存在するわけです。ところが、インターネットでアクセスする以上、アクセスへの開かれというのはあります。これは双交通です。この場合はユーザー相互の双交通になります。ですから、光のアートとして、開かれた作品たり得ると考えられるでしょう。すなわち、インターネットを通じてアクセスすることで、受け手が関与して、創造性に関わっていくという、そこに大きな特徴があるといえます。

ただ、芸術というのは異交通の特権的な場だというのが私の基本的な考え方です。異交通というのは言い方を変えると、差異がとんとんとんとん増幅される世界です。では、この場合、異交通めいたことが起こるとして、ということが考えられるかという、鍵はアクセスというところにあります。アクセスということに我々あまりにも慣れきっているけど、それをあくまでひとつの出来事として考えてみてはどうだろうかと思うのです。アクセスするということは、ひとつの出来事になると。

その点で特に思ったのは、どうしてもタイムラグがあるということです。作品が置かれた現場に反映するのに4秒かかるって聞きました。さらに、フランス人の研究によると、自分がアクセスしたことで点灯するなり消えるなりする、その反応がわかるのが15秒かかるとのこと。そういったことは、ひとつの出来事性の特徴にもなります。なぜかという、端的に言って時間がかかっているからです。まだかなあという待機する時間もあれば、振り返る時間性もあるでしょう。以前へのアクセスを振り

返りながら、今アクセスするとか。以前の画像を振り返りながら今アクセスするとか。そういう時間の厚みの中で、生起する。それこそが出来事性だと思われるのです。本当の意味での瞬時性しかない世界には、差異もなければ、出来事性もないと、考えるわけです。

さらに話を広げれば、我々の世界は、感じ分けと行い分けと語り分けで成り立っているというのが私の基本的な考え方で、これはアートだけじゃなくて、政治とか法律とか歴史とかいろんなことに関わります。ここで、感じ分けとか行い分けとか語り分けとか、分けという言葉を一いち付けているのは、差異と対応させたいからです。アートの場合は、感じ分けに重点がある。そして、感じ分けることで際立つ差異、使い分けることで際立つ差異、語り分けることで際立つ差異が、それぞれ増幅しあって、アート・ワールドが生まれてくるっていうのが私の考え方です。例えばモナリザ。静岡の美術館で、当時の学芸員の李美那さんがモナリザがどういうふうに使分けられてきたか、平たく言うと、どうやってパロディが作られてきたか、それをたどる展覧会を企画したことがあります。モナリザがたくさんそういう使い分け、パロディでも引用でもいいですが、使い分けされればされる程、モナリザの値打ちは上がります。もっとモナリザの感じ分けをしっかりと感じ分けしようとか、逆にそういうふうにもなるわけです。さらにモナリザになるといろんな解釈がされますから。同性愛を隠す画像として解釈する

人もいますし、デュシャンみたいに、欲求不満を起こした女性として捉えるということもできるでしょうし。でも、そういう語り分けが多い程、モナリザの値打ちはやっぱり高まるわけでしょう。その辺はあっさりと考えた方がいいと思います。差異が増幅されればされる程いい作品なんだと。妙に屁理屈こねて芸術の永遠性とか、不朽性とか、言う人いますけど、何の意味もありません。

最後に、私の使い分けの例です。というのも、これまでのアクセス反応に見られたような、ハートマークで充足するとか、「HI」と出て充足する、これではアートになりません。リオタールという哲学者が、フロイトの夢の考え方と自分の哲学を対比しながら言っていたとおり、芸術というのは夢で充足するみたいな、欲望の充足ということではなくて、非充足の空間、いつまで経っても充足しない空間を開くのが芸術だと思います。ハートマークで落ち着いたり、「HI」で落ち着いたり、あるいは全部点灯させて落ち着いたりとか、いろんな落ち着き方があるでしょうけれども。私なら、こうアクセスして点灯させるということでの提案です。○で示したのが点灯部分です [図6]。その部分をつなげると、 $\pi 0 \infty$ と読めるようにしたつもりです。ある意味で、藤幡作品とネット空間との関係も表しているのではないかと、私本人は考えています。

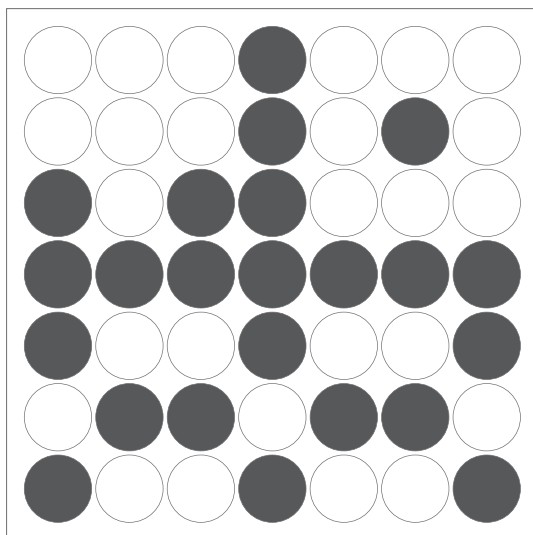


図6 篠原資明「 $\pi 0 \infty$ 」～藤幡正樹《Light on the Net》のために（2017年）